# 光明寺だより

第82号
浄土真宗本願寺派
光　明　寺

〒793-0030　西条市大町550
TEL 0897-53-4583

## 心に残る詩

### 「涙」

塔和子

あるとき
死のうと思った私が夫に
「一生懸命なのよ」と言うと
夫は
「同じ一生懸命になるのなら
生きることに一生懸命になってくれ
がむしゃらに生きようではないか」と
言ってくれた
私は目が覚めたように
そうだと思った
どんなに一生懸命生きたとしても
永遠に続いている時間の中の
一瞬を
闇から浮き上がって
姿あらしめられているだけだ
いのち
この愛(いと)けないもの
思いっきりわが身を抱きしめると
きゅっと
涙が　にじみ出た

著者略歴

1929 年　愛媛県に生まれる。
1943 年　ハンセン病を発病、国立療養所大島青松園に入所。
治癒後も後遺症のため同園にとどまる。
1989 年　ドキュメンタリー作品『不明の花　塔和子の世界』（毎日放送）放映。
1999 年　高見順賞受賞。詩集多数。『塔　和子全詩集３巻』
2003 年　ドキュメンタリー映画『風の舞』（宮崎信恵監督）公開。
2007 年　愛媛県西予市明浜町シーサイドパークに塔和子文学碑建立。
2008 年　同町大崎鼻公園に第 2 文学碑建立。

# 一口法話

## キリスト教から浄土真宗へ

今年1月28日、92歳のご生涯を閉じられた元萩女子短期大学の名誉学長・河村とし子先生をご紹介したいと思います。

先生は兵庫県明石市の、敬虔なクリスチャンの家庭に生まれ、地元の学校を卒業後、東京女子大学に進まれます。そこで今は亡き夫、河村定一氏と知り合われ、生涯クリスチャンとして生きるという事と、夫の実家で暮らさなくてもいいという事を条件に結婚されます。

ところが、戦争が次第に激しくなり、空襲を避けるため夫を東京に残し、子供二人を連れて、夫の実家に疎開されるのです。実家は山口県の萩市にほど近い山間の村にあり、年老いた両親が家業の農業を営んでいました。

「こんな思いがけないところに来たのはキリスト教を広めよという神様の思し召しに違いない」と思い込んだ先生は、クリスチャンとしての使命を果たすべく、その日から毎晩のように両親の部屋へ出向いてはキリスト教の教えを説き始めるのです。

夫の両親は、嫌な顔もせず「そうか、そうか」とニコニコしながら彼女の話を聞いてくれたそうです。

そういう日が続いていくうちに、先生の心の中に微妙な変化が起こるのです。

それは、四人の子供を立て続けに亡くされたにもかかわらず、両親の生活からはその暗さやわびしさが全然感じられないのです。しかも、都会育ちで田舎の習慣になじもうとしない彼女のような傲慢（ごうまん）な嫁に対して両親は本当に親切にしてくれるのです。さらに驚くべきことに、田舎の生活には珍しく、日の良し悪しや、占い、まじないといった迷信めいたことが全くなく、河村家の家訓として代々言い伝えられてきたことが、人間として一番大切なことは、お寺に参って仏法を聴聞することだというのです。そうして、「仕事は聴聞のあまりがけですればいい」というのです。

このような、仏さまを中心に穏やかな日暮らしを続ける両親を見ているうちに、お寺というのは一体どんなところなんだろうという思いが生まれてきたのです。そこで先生は好奇心も手伝って生まれて始めてお寺を訪れることになるのです。

その時のお説教が、「善人なおもて往生をとぐ、いわんや悪人をや」というものでした。

これは、阿弥陀さまの救いの目当ては善人ではなく悪人だという、浄土真宗の教えの要になるお話です。これまで、善人は救われるが、悪人は裁かれると、キリスト教で教えられてきた先生にとって、初めて聞くこのお話は大きな驚きでした。そうして、その話全体を通して何ともいえない感動を覚えたのです。

このことがきっかけになり、先生は次第に仏教の勉強を始めるようになりました。特に、クリスチャンとして守るべき戒律を中々守れないことに矛盾を感じていた先生にとって、自分の浅ましい心をごまかさず赤裸々にさらけ出していかれた親鸞聖人という方に、何ともいえない安堵感を覚えると同時に、強く惹かれるものがあったのです。

何としてもこのお念仏の道を極めたいと、方々のお寺に聴聞に出かけました。しかし、その道は決して平坦なものではありません。聞けども聞けども心の底からうなずけるまでには至らないのです。純真で一途な先生は、いっそのこと離婚をして、家を出てでも、このお念仏の道を求めていきたいと両親に願い出たこともありました。そんな時、両親は「聞きたいという気持ちが起こったということは、もう仏さまのお手の中に抱かれているということだから、ともかく家のことも子供のことも一切私たちに任せて、気の済むまで、日本はおろかどこまでも行ってお聴聞してくるがいい」と励ましてくれたのです。

こうして懸命に道を求める先生に、ついに仏さまのお心に出遭う時が来るのです。

その時のことを次のように語っています。

……いつものように理屈をこねながら聞いておりました私が、今まで思いもしなかったことに気付いたことがあります。自分が生きて自分が求めて、自分がこうして苦労しているんだと思っておりましたこの私というものが、自分で生きているんじゃない、人間を超えた大きな大きなおかげさまで生かされている私だということに、フッと気付いた瞬間があります。本当にそれは瞬間なんです。ところが不思議でならないのはお念仏を唱えることが大嫌いだった私が、その時全く無意識のうちに『南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏』と声に出してお念仏を唱えていたのです。そうだったのか、呼ばれている身だったんだ、願われている身だったんだと、その時はっきり気付かせていただけたんです。その日は家に帰る道すがら、深い感動に襲われ涙が止まりませんでした……。

これを信仰の上で「回心（えしん）」というのです。

さらに先生は次のように語っています。

……その日を限りに私がありがたい人間に変ったのかと言いますと、私自身はちっとも変わってはいないのです。傲慢（ごうまん）でもあり、不遜（ふそん）でもあり、どうにもならない浅ましいものを抱えていることにはちっとも変わらないのです。けれども、その私にお念仏が出て下さることによって、のど元まで怒りがこみ上げた時には、我慢せよと慰めて下さる。道を間違いそうになった時には、危ないよと呼んで下さる。悲しみのどん底にある時には、共に泣いている親があることを忘れるなよと呼んで下さる。そんな、阿弥陀さまの呼び声であるお念仏によって導かれていく日暮の安らかさというものを、私は知ることが出来たんです。本当にみ仏さまに出遭わせていただいたというのはそのことだと思います……。

これが信心を頂いた念仏者の日暮らしというものです。よくよく味わっていただきたいと思います。

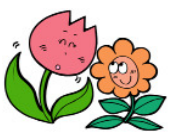
こうしてクリスチャンから念仏者へと転じていかれた先生は、来し方を振り返り次のように語っています。

……私の人生で最もありがたかったことは姑（河村フデ）との出遭いでした。一字の読み書きも出来ない母でしたが、阿弥陀さまにすべてをおまかせすることを、身を以って教えていただいた方でした。決して説教じみたことや押し付けがましいことを言う人ではありませんでしたが、母は私を教化下さるために、この世に出てこられた仏さまではなかったかと思います……。

「人は人によって育てられる」と言いますが、ことに仏法はその真理を体現した人を介さなければ決して伝わりません。それだけに、そのような人（仏法の体現者）との出遭いが極めて大事なことになるのです。

相田みつをさんの詩に次のようなのがあります。

そのときの出逢いが
その人の人生を
根底から変えることがある
・・・・・
人間を根底から変えてゆくもの
人間を本当に動かしてゆくもの
それは人と人との出逢い



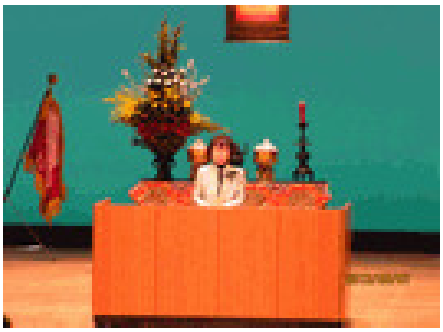
まことにその通りだと思います。

出遭いの背後には、遠い遠い過去世から今日に至るまで無量無数のご縁がはたらいていたことを思う時、「たまたま行信（ぎょうしん）を獲（え）ば、遠く宿縁を慶べ」という親鸞聖人のお言葉をあらためて思い起こさずにはおれません。

**★『たまたま行信を獲ば、遠く宿縁を慶べ』**

**たまたま偶然にも、お念仏のみ教えを喜ぶ身にさせて頂いたならば、それは我が思いを超えた遠い遠いはるかな昔からのご縁があったのだと心から慶ぶべきです**

# 「愛媛県仏教婦人研修大会」盛大に開催！



３月７日（木）西条市総合文化会館において、「愛媛県仏教婦人研修大会」が行われました。西条組仏教青年会の僧侶のお勤めによる開講式の後、宮崎幸枝先生（医療法人精光会理事長）の『人生の解決―お浄土があってよかったね』と題した記念講演がありました。

【講演主旨】

（医療現場での豊富な事例上げながら・・・）死を意識せざるを得ない患者さんの究極の願いは「救われたい」ということです。我が「いのち」は、死とともにお浄土に生まれ永遠のいのちをいただく、その「お浄土」が、すでに如来によって建立されてあることが心の底から頷けた時、人生の解決はつくのです。死すべきいのちを生きている私たちも、患者さんと同じです。人生の解決は「今」です。「今」なされなければなりません。親鸞聖人のみ教えは、まさに人生の究極の解決を示すものです。

# 「彼岸会法座」つとまる！

さる３月３０日（土）、小林顯英先生をご講師にお招きして「春の彼岸会法座」が勤まりました。

【講演主旨】

「恩」という字は赤ちゃんが座布団の上で大の字になって安心して寝られるようにと、周りの人々が心を配っているということを表している字です。その心配りに気づくことを「恩を知る」と言い、気づかないことを「恩知らず」と言います。

―涙には涙に宿る仏あり　名告（な の）りしみ名を阿弥陀と号す―

阿弥陀さまは深い悲しみに沈む人に寄り添い、共に涙して下さいます。その同悲同苦のお心に気づかせてもらうことによって深い安らぎと生きる支えをいただくことが出来るのです。生まれ難い人間に生まれ、遭い難い阿弥陀さまの大悲のお心に出遭う、そこには計り知れない多くの人々の心遣い心配りがあったはずです。そのことに気づかせてもらうことが何よりも大事なことです。

# ご門主、来年６月にご退任

ご門主は、立教開宗記念法要の最終日にあたる４月１５日、満堂の参拝者の前で「お言葉」を述べられ、来年６月５日をもって本願寺住職、浄土真宗本願寺派門主を退任されることを決意されました。宗祖親鸞聖人から受け継がれてきた法灯は新門様が継承され､第２５代門主（本願寺住職）に就任されます。

現門主は、昭和５２年、勝如上人（大谷光照前門様）より法灯を継承されてより、全国各祖へのご巡教や蓮如上人 500 回忌法要（平成１０年)、親鸞聖人７５０回大遠忌法要などの大法要を修行されたほか、全日本仏教会会長を３度歴任されるなど宗門の内外に輝かしい足跡を残されました。

退任される主な理由は、２０１１～１２年に「親鸞聖人７５０回大遠忌」の法要を終えたことや、時代に対応する宗門の体制が整えられたことなどを挙げておられます。また「１０年後には親鸞聖人ご誕生 850 年を迎える、新たな歩みを始める良い時期だと思う」とも述べられています。(「お言葉」参照)

法灯を継承される新門様は現在、築地本願寺の副住職として実務に就いておられ、首都圏をはじめ各地をご訪問され宗門への理解を深められており、新鮮な感覚をもって本願寺の運営に携わって頂けるものと期待しております。

本山ではこれから「法統継承式」や数年後に厳修される「伝灯奉告法要」の準備を進めていくことになります。

## ご門主お言葉

このたび私は、本願寺住職、浄土真宗本願寺派門主を退任することにしました。

1977（昭和 52）年４月に就任して以来、満 36 年が過ぎました。明年の６月５日をもって退任いたします。

先代・勝如門主は 1973（昭和４８）年の本山本願寺における親鸞聖人ご誕生 800 年・立教開宗 750 年のご法要を終え、引退をお決めになりました。

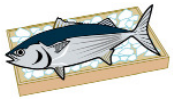
私は､親鸞聖人 750 回大遠忌法要のご満座の導師をつとめることが出来ました。そして、時代の変化に対応するよう宗門の組織が整えられました。10 年後にはご誕生 850 年を迎えます。新たな歩みを始めるよい時期であると考えます。

―中略―

申すでもなく、私は住職、門主の職務を離れましても、浄土真宗の僧侶であることには変わりありません。退任後もご法義繁盛のため、その務めを果たす所存です。

宗門の行事等は１年以上前に準備を始める場合も少なくなくありません。継承が円滑に行われるよう、この時期に退任を表明することにしました。

## 趣味の広場



# 俳句を楽しむ（六十一）

森本隆を

例年に比べ今年の春は風の強い日が多く、また何となく寒い春だった様な印象でした。ゴールデンウィークは天気に恵まれ多勢の人々が春に別れを告げながら、日本中を行楽に右往左往していました。私は例年この時期は、生まれてから中学二年まで暮らした所薮という在所へ行って春の最後を楽しんでいます。畑の草取りやお茶の葉摘みなどして、世間の混雑や渋滞などという話題とは無縁の、実にのんびりと穏やかな時間を楽しみます。ま夏の三、四か月間に飲むお茶っ葉や、暮の餅つき用のヨモギの葉は、私の家ではこの時に全て調達しています。満目の新緑、時鳥（ホトトギス）の鳴き声などを心から楽しむ数日です。

谺（こだま）して山ほとゝぎすほしいまま　杉田久女

高原の朝あをあをとほととぎす　行方寅次郎

ほととぎすは夏の季語です。時鳥は南アジアから日本の夏に来る渡り鳥で、我々の祖先は「夏を知らせてくれる鳥。時を告げる鳥。」として「時鳥」と呼んだのですね。ただ、この鳥は卵を産むと、ウグイスやミソサザイの巣に卵を預け雛を育ててもらうという習性があります。これを托卵というそうですが、面白くも横着な習性ですね。ただ俳句の世界では、春の花、秋の月、冬の雪と並んで夏の時鳥は最も重要な季語になっています。

女居て見えぬ茶摘と話しをり　山本　京童

人は人に何を話すや茶摘みつつ　青木つね子

向き合うて茶を摘む音をたつるのみ　皆吉　爽雨

私共が茶を摘むのは里山の竹薮、ご先祖様が植え残してくれた茶が大小二十本余り。文字通りの放置竹林の下にあり、今や茶の木も自生状態。下草や茨をかき分けつつ茶を摘んでいます。しかし、家に持ち帰って茶葉を炒（い）って揉（も）み乾燥していわゆるお茶っ葉にしておけば、ひと夏、ほろ苦く自然の味わいのお茶が飲めます。ただし、この「茶摘」は、春の季語となっています。

初夏の句に戻りますが、よく俳句初心の頃に聞かされる教えに、「一句に季語をひとつ必ず用いて詠め」とよく言われますね。では、次の有名な句はどうなるのでしょうか。

目には青葉山ほととぎす初鰹　山口　素堂

作者は三百年ほど前の俳人。よくもこんな一句に季語が三つもある句が名句として今まで人々に愛されてきたものだと感心します。現在ではこの句については、まず三つの季語は視覚（青葉）、聴覚（ほととぎす）、味覚（初鰹）の三つで旬（しゅん）の訪れを的確に表現していること、次に三つとも同じ季節のものであること、そして、句の中心は江戸人の初鰹に寄せる想いの強さがあることがはっきりしている、この三点をあげて問題なく名句として認められています。当時、初鰹が江戸の市場に三本もあがると大評判になり、一本の値段が三両だったといいます。今のお金にすると二十万円位になりますから武家奉公の使用人の一年分の給料くらいだったそうです。これでは句の中心が青葉や時鳥にならないのは当然ですね。これからの初夏、大いに自然を楽しんで下さい。

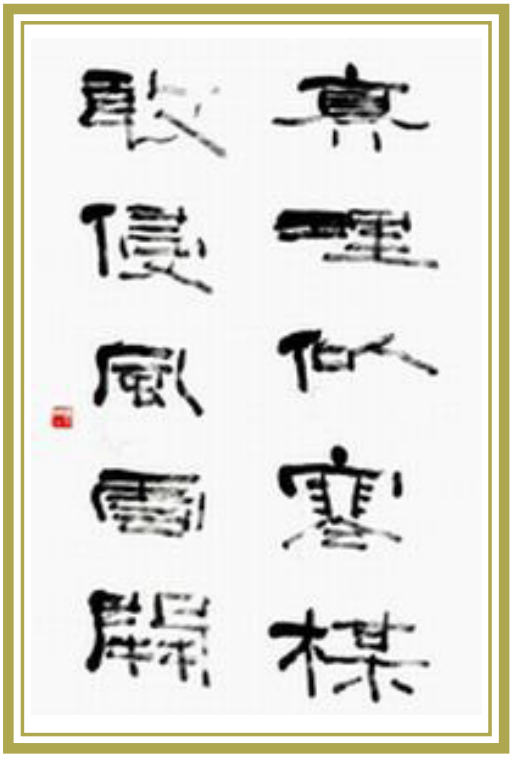
夏めくや素足の裏に庭の土　渋沢渋亭

あぶらとり一枚もらふ薄暑かな　日野草城

拭き込まれ五月冷たき炉の板間　木村蕪城

初夏や憂き出来事もいつか過去　高木晴子

# 住職書作品



【字句】　真理似寒梅
　　敢侵風雪開

【読み方】　真理は寒梅に似たり
　　敢えて風雪を侵して開く

---

## BOOK　本

## 浄土真宗　はじめの一歩

出版社　本願寺出版
著　者　森田真円・釈徹宗
定　価　1260 円（税込）

本書は、タイトルの通り浄土真宗の入門書です。第一章「浄土真宗の教え」では他力本願、悪人正機などキーワードで浄土真宗の教えを紹介しています。また第二章「なるほどナットク浄土真宗」では戒名と法名、天国と地獄の違いなどを分かりやすく解説しています。この他、お仏壇のお飾り、焼香の作法、本願寺の参拝案内などが収録されています。目次は次のようになっています。

第一章　浄土真宗の教え
第二章　なるほどナットク浄土真宗
第三章　お仏壇のある暮らし
第四章　お寺に参りましょう
第五章　本願寺

「光明寺だより」をご家族の皆さんでお読みください

次回発行予定…７月下旬

テレフォン法話
0897-53-4585

## 言葉のプレゼント

私が無駄に過ごした今日は
昨日死んだ人が痛切に
生きたいと思った一日である

### 光明寺のホームページ

http://www.koumyouji.com/

南岳山光明寺
または
西条光明寺
検索

## 話題

★ご門主（大谷光真門主）が来年６月、ご退任されることになりました。
（＊関連記事５ページ）

★３月７日（木）午後１時より、愛媛県仏教婦人研修大会が西条市総合文化会館で開催されました。
（＊関連記事４パージ）

★３月30日（土）午後２時より、小林顯英先生をお招きして「春の彼岸会法座」が開催されました。
（＊関連記事４ページ）

★今春、京都にいる５人の孫（長女の子供）のうち、長女は高校生に、長男は中学生になりました。月日の経つ早さを感じます。